

桐に恋して18年

「桐」は一番バツター

中国の大地で始めた桐の植林。5年前日本の桐植林危機的状況にある事を知り、日本国内でも植林試験地を設けました。日本特有の四季や自然環境に適した植林方法や育林方法を諸先輩方からご指導を賜り、実践してまいりました。そして、植林、アク抜き、『住宅に多少のキズが付いても心と体にキズが付かない桐の住宅づくり』という流れの中で、桐の植林を復興させる3つの課題が明確になりました。

まず第一は、高付加価値桐製品の開発。これは、アク抜きにより、桐本来の機能を発揮する製品の開発と製造。

第二は、今山に放置されている杉を伐採して桐を植えるため、杉の黒字化を目的とした杉の新商品開発です。日本では、杉と桐の混植が大変良い結果を生んでいた事を、植林地での聞き取り調査で知りました。

第三は植林で最もコストのかかる最初の5年間の植林コストをどう凌ぐか。これは、桐と桐の木の間で農作物を無農薬栽培し、その生産収益で植林コストを補う試行を2年前から始動しました。桐の新商品製品化はほぼ終了し、杉新商品開発も来年中にはメドが付きそうです。

『杉を切って桐を植える。桐を植えて野菜を作る』針葉樹と広葉樹の一体、林業と農業の一体があつて初めて日本の農林業に活力が戻るといふ実感を得ています。そして将来、もっと多くの樹種の用途研究を進め、日本の林業が多樹種自然植生に近づけば近づくほど、環境にも林業経営にも寄与する山づくりを目指したいと思います。その一番バツターとして、促成木で用途が広い『桐』に、私は恋したというわけです。成長が早いという事は、CO2固定吸収速度が速いという温暖化対策樹種である側面も有しています。

さて、木材、木質建材の年間販売額が仮に1億円とすると、毎年ざっと1万本の丸太の恩恵を受けて

いることとなります。木材に営みを委ねる私たちは、川上から川下まで一体となって植林に汗しなれば『お父さんは間違った仕事はしていない』と、子供や孫に胸を張れないと思うのです。

来春、NPO『桐、ささやかな植樹祭』より日本初の桐専門書『桐大全』一〇〇〇ページが出版されます。当NPO理事で桐の研究一筋60年、84歳になられた飯塚三男先生の桐研究の集大成です。桐の歴史、文化、植生、植林育林、用途に至るまでを網羅し、日本を熟知しているようでもまだ知り得ていない方にも必見の一冊です。

なお、来年二月一五日（金）、三月一九日（土）東京で桐のセミナーを行います。参加ご希望の方は弊社までお問い合わせください。

株式会社グリーンフラッシュユ.

代表取締役 八木隆一